一人ひとりが尊敬される仲間関係づくり

人権と仲間関係研究会　阪本 明子 さん

人権保育専門講座７では、「一人ひとりが尊敬される仲間関係づくり」をテーマにして、阪本明子さんに４歳児の実践報告をしていただきました。その後、グループに分かれて、報告にもある「できる・できない」によって決めつけてしまう子どもたちの様子等について交流しました。

《実践報告「いっしょに修行しょうか！～これからも修行は続くのでござる～」より》

私は、きめつけを許さない、人権が大切にされる関係を通して、一人ひとりの育ちを豊かにしていくことが保育の原点であると捉え、そこにこだわって保育に取り組んできました。

私が担任した子どもたちの様子を見ていると、あそびのイメージが弱く、「キャラクターあそび」や「ちょっかいあそび」に流れる姿がありました。また、子どもたちは、様々なことに興味をもち、あそびが広がっていく一方で、自分を基準に「できないくせに」と仲間を見下すことで自分の存在を誇示する姿がありました。

そのような姿を克服していくために、私は子どもたちのなかに「修行中」という共通言語を育みました。「修行」はできないことからの出発で、やりつづけることが面白い・やってみようと取り組んでいる自分や仲間が素敵だという価値観を子どもたちのなかに育てていきたいと思い取り組みました。

その取組を通して、できないから諦めようとしているときには、「修行してみよう」とはげましたり、できるからと周りを見下しているときに「まだまだ修行がたりん」と周りが返したりする子どもたちが出てきました。また、「できないくせに」との捨て台詞に、腕力や泣くだけの抵抗を見せていた子どもが「修行してんねん」と返す姿がありました。

能力主義的なものの見方、つまり、「できることがよくて、できないことはダメという価値観」は、子どもが自分と相手のことを比較できるようになってくる３歳後半から４歳ころに出てきます。それは社会のなかに、そのような価値観があるからです。教育・保育の現場でも、「一人でやっていく力を身につけていくことが教育・保育なんだ」という考え方が何となく覆っていないでしょうか。それができなければ、「あなたが悪い」と、自己責任で片づけてしまうような社会の雰囲気はないでしょうか。能力主義や自己責任といった風潮が社会のなかにあるなかで、そのような子どもたちの姿を克服していくためには、私たち（保育者）は何ができるのか、具体的な子どもの姿を出し合いながら、ともに考える講座になりました。

【参加者アンケートより】

- 能力主義的なものの見方は３歳半からとありましたが、仲間づくりは０歳児から始まっているという話を踏まえると、おとなの考えやかかわりによって形成される価値観が大きく影響すると感じました。どの年齢の子どもに関してもおとながモデルとなることを忘れずに、その子自身を大切にする保育を心がけていきたいです。
- 能力主義は良くないから競争はしないというのではなく、競争の面白さも感じつつ、努力の過程を大切にしていくような遊びを考えていきたいと思いました。
- 実践報告を聞いて、自分自身も能力主義に囚われていた部分があると思いました。子どもたちに出来ないことが悪いことではないということを伝えていくために、今日の実践報告を参考にしていきたいです。